

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集：FXニュースレター

執筆担当：斎藤登美夫

◆◆◆ No.0887 ◆◆◆

26/04/15

【 一時萎んだ「日銀早期利上げ」期待が再び勢い増す 】

3月25日付けの当レターで、筆者は「『日銀早期利上げ』観測は後退した感あるが」ーとレポートした。そのなかで今月末27-28日に実施される日銀金融政策決定会合においても、利上げ期待が後退していたわけだが、何故かそのうち「強気派＝利上げ派」が勢いを増しつつあるようだ。しかし、その一方で利上げ消極派も巻き返しを図っており、足もとの様相は混とんとしている。双方の鏝迫り合いの末、果たしてどういった結論を見るのか、しっかりと注視しておきたい。

◎「異次元緩和」策導入の黒田・日銀前総裁も「利上げ容認」

詳細は前記した3月25日付けレポートを参照していただきたいが、植田日銀総裁をはじめとする「利上げ前のめり派」がけん引する格好で、これまで日銀は積極的な利上げに動いてきた。それも、2026年についても「最低でも2回、0.5%幅の利上げ実施」はほぼ当確。場合によってはそれ以上で「3回の利上げ、トータル0.75%の金利引き上げ」ーを見込む向きも当初は少なくなかったようだ。

しかし、そんな強気スタンスに冷や水を浴びせたのが、2月16日に実施された高市首相と植田日銀総裁の直接会談。終了後、植田氏は記者団に対し、首相から金融政策についての要望は「とくになかった」と発言したが、そのうち毎日新聞が報じたところによると、高市首相から「厳しい態度」で追加利上げに難色を示されたという。つまり、誤解を恐れずに指摘すれば、高市首相から一連の利上げに関して「お灸」を据えられたと言えるかもしれない。

また、その後も日銀審議委員をめぐる同意人事で、中央大名誉教授の浅田統一郎氏と青山学院大教授の佐藤綾野氏という金融緩和に前向きな「ハト派」が内定するなど「包囲網」が完成し、ますます「強気派」の肩身が狭まってきた感を否めなかった。

一部には、「日銀、つなぎとめた4月利上げ予想」(3月23日付け日経新聞)のように、足もと4月に昨年12月以来の利上げ実施を見込む向きも残存していたが、一般的な見方としては早期利上げ観測が大きく後退。そして、それが為替市場におけるドル高・円安、ドル/円相場が一時160円台を記録することになる原動力のひとつになっていたことも間違いないだろう。

いずれにしても、一時期大きく後退していた感の否めなかった「強気派＝利上げ派」が、ここ最近になり再び勢いを増しつつあるようだ。

ちなみに、筆者が最初に違和感を覚えたのは3月27日に朝日新聞が報じた黒田・日銀前総裁のインタビュー。改めて指摘するまでもなく、黒田氏といえばゼロ金利政策にとどまらず、「異次元緩和」と呼ばれた手法を生み出した張本人。根っからの「ハト派」で利上げ反対派と思いきや、なんとインタビューのなかで最近の日銀利上げスタンスをまず容認。そのうえで「中立金利の1.5%前後まで、今年と来年で0.25%ずつ3-4回利上げしても問題ない」との見解を示していた。

また、それに続いて今月12日のNHKの番組で、赤沢経産相が「原油価格が高騰するなか、物価高対策として日銀による利上げがひとつの選択肢としてはあり得ると思う」ーと述べたことも正直驚きだった。すなわち内閣不一致、あるいは高市政権は再び変節し利上げ容認へと舵を切ったのか、と。

また、14日には海外からの「アシスト」として、国際通貨基金(IMF)が公表した最新の世界経済見通しにおいて「日銀は段階的な利上げを行うと予想されるが、その利上げペースは昨年10月時点の予想よりも加速している」と指摘していた。ある意味「不自然」なほどの、日銀利上げの援軍そろい踏みと言えよう。

ただし、前述したうち「赤沢発言」については、片山財務相が14日の閣議後記者会見で、高市首相と自身が「金融政策に言及する発言は控えてほしい」と赤沢氏に注意したことを明らかにしている。そのうえで、赤沢氏は「具体的な手法は日銀に委ねられるべきだというのが法律上の立て付け」と、先の発言をやや修正した格好になったという。

ともあれ、以上を踏まえて思うことは、政府そして高市内閣による「利上げに消極的」というスタンスは基本

的に変わっていないと思われるのだが、「反高市」などと言われる勢力がだいぶ暗躍しており、状況は拮抗している感もありそうだ。政権の思惑どおりに、事態が進むか否かは正直未知だ。4月28日に予定されている肝心の金融政策決定会合の結果発表まで、残りは10日あまり。まだまだ予断を許さない気がしないでもない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。



Copyright (C) fx-newsletter limited company All Rights Reserved



FX-newsletter